

## 大学教育学会第29回大会に参加して

FD部門・授業評価部門委員長 池田 勝彦



2007年6月9日（土）、10日（日）で東京農工大学において、大学教育学会第29回大会が開催された。9日は京都でFD関連の会議があり、そちらに参加したため、標記の大会には10日から参加することになった。2日目の午前は、自由研究ⅠからⅨが同時並行して行われた。自由研究の

テーマは次のようであった。自由研究Ⅰ：「初年次教育」、Ⅱ：「成績評価・授業評価」、Ⅲ：「アドミッション・地域連携」、Ⅳ：「大学職員・学生支援」、Ⅴ：「FD・教育評価」、Ⅵ：「学士課程教育・教養教育」、Ⅶ：「自然科学基礎・サイエンス・リテラシー・教育工学」、Ⅷ：「コミュニケーション」、Ⅸ：「キャリア教育・歴史」。今回は同日午後で開催されたシンポジウムⅡ「教育と研究を考える」に参加することをメインにしていたので、この内容に報告させていただくことにする。自由研究などについて内容をお知りになりたい場合は、概要集を授業支援ステーション（第2学舎）で保管しているので、ご連絡いただければと思う。

今回のシンポジウムのテーマである「教育と研究」は、真正面から議論することがあまりない（しない）テーマであるともいえる。大学は「研究」と「教育」を行う場所（現在は「教育」と「研究」の並びがよいかもしれない）であり、車の両輪であるので、どちらも疎かに出来ないという暗黙の了解事項のようになってきているともいえる。また、「研究大学」や「教育大学」というような話題が耳に入る機会は多くなってきており、大学がその使命をどちらかに特化させる時代になりつつあるのかもしれない。大学を取り巻く環境が急変しつつある現在において、大学での「教育と研究を考える」ことを避けることが出来ないのかもしれない。このような環境下で、非常にタイムリーなテーマであったと思う。

シンポジストの先生方は、高エネルギー加速器研究機構：永宮正治先生、東海大学 理学部：安岡高志先生、大阪市立大学 大学教育研究センター：飯吉弘子先生の3名であった。本シンポジウムの司会は桜美林大学：館 昭先生が勤められた。次に、おのおの先生の講演について簡単に紹介する。

永宮先生（高エネルギー加速器研究機構）は「教育と研究—外国の例から学ぶ—」というテーマで、永宮先生が米国のコロンビア大学で教鞭を執られていたときの経験から得た内容であった。これらの経験から教育と研究の関わりについて以下の4つにまとめられた。

①研究から教育への影響は非常に大きい、②教育を受け

ることの研究への影響は大きい、③教育することの研究への影響は中か大程度、④研究をしないことの研究への影響は、特殊な例があるので、はっきりと分からない。また、教育は知識でなく、物事を極めていく道筋や姿勢を学生に教えること（概念教育と名付けられた）であるということ提言された。安岡先生（東海大学）は「教育と研究を考える」というテーマで講演された。内容は教育と研究の関係を統計的処理によりその相関を検討するということがあった。統計のためのデータとしては、授業評価と研究業績（論文数など）を用いている。結論として、これらの相関は極めて希薄であるという結果を得たとの報告であった。そこで、この希薄な相関であるのであれば、教育と研究は分離していいのかという問いに対して、安岡先生から大学の授業を「教育と研究が相関するような」授業にするべきであるという提言がなされた。飯吉先生（大阪市立大学）は「古典的葛藤」を超える道—先行研究の整理と問題提起」というテーマで講演された。大学における「古典的葛藤」とは「〈教育〉か〈研究〉か」という問いであり、この問いは近代以降の大学が抱えてきた問題で、日本でも少ないながら研究は続けられて来ている。この「古典的葛藤」が改めて論じる必要が出て来た背景として、「外からの視点への気づき」、つまり外への説明責任への意識から、従来の大学枠組みの外から大学を眺めてみることで、今まであまり意識しなかった自らの課題への明確な自覚・意識が生じ、また、その課題への自分たちなりの解を模索する必要性を実感したためであると説明された。さらに、大学を取り巻く環境変化の大きく作用している点も述べられた。最後に、教育と研究の葛藤を超える道への問題提起として、1) 大学という場における意識改革の視点、2) 大学組織全体のシステム改革という視点、これらの両視点から問題提起がなされた。

紙面の都合で、具体的でかつ重要な内容を十分に披露できなかったのは、ひとえに著者の「纏める」能力不足であることに由来し、お許しいただければと思っている。

本学でも「教育」と「研究」について、真正面から議論しなければならない時期が来る、いやとつくりに来ているのかもしれない。問題は我々がそれを真正面から見るかどうかかもしれない。

（化学生命工学部教授）

## 私大連 FD 推進会議～期待される大学教育像と授業～に参加して

社会学部専任講師 守 如子

今年8月、一泊二日にわたるFD推進会議に参加させていただく機会を得た。70名をこす新任教員が全国の大学から集まってきたわけである。

日ごろ、自分自身が担当する科目の教え方について、個人的にまわりに相談する機会には恵まれているものの、2日間にもわたってじっくりと考えたり、たくさんのかたがたと意見を交換したりという経験は初めてのことである。お互いの状況や抱えている問題をゆっくりと話しあえたことは、個人的に大変意義があった。ご専攻や担当をされている科目にかかわらず、多くの先生方が同じ問題で試行錯誤されているのだと確認できたことが何よりの収穫である。

今回の推進会議のハイライトは模擬授業ワークショップであった。6～7人がグループになり、互いが学生役になりつつ模擬授業を行った。私自身の模擬授業についていえば、グループメンバーのみなさんから自分では気付かなかった部分を指摘していただくことができた。聞き手に講義の流れを理解してもらうために、もっといろいろな配慮ができることをご指摘いただいた。また、自分自身が面白いと思っていることを話すときには、その感情そのものも伝わっていることがわかった。まずは、自分自身が知的好

奇心もち、学問的研鑽を積むことが講義においても基盤であることを改めて確認した。

他の先生方の模擬授業を拝見するのも大変勉強になる。学生を授業にひきつけるため、みなさんがきめ細かな工夫をしていることがよくわかった。たとえば、問題形式をとることによって興味を喚起したり、共感をひきだす問いかけや身近な事例への置き換えによって、授業の主題をより身近に感じてもらったり、資格試験のための科目であっても構成を工夫することによって単なる用語解説ではなく主題のある講義にしたり、思い出せるものだけでもさまざまな工夫がみられた。

また、自分の専門ではない科目を、いわば、学生に近いポジションで聞くことによって、新しい知識を「理解できる」ことは面白いことであるということも改めて実感した。専門的な内容であっても、どの先生方もわかりやすく説明することに心血を注がれていた。噛み砕いて説明してもらうことによって、それぞれの学問の面白さの一端を知ることができたような気がする。今後の自分自身の担当科目の中で、今度は自分がそれを伝えていけるように努力したいと気持ちを新たにさせられた。

## 私大連 FD 推進会議～期待される大学教育像と授業～に参加して

化学生命工学部専任講師 上田 正人

私大連FD推進会議が2007年8月6日（月）、7日（火）にランドホテル浜松で開催された。35大学から71名の新任専任教員が参加し、本学からは2名が参加した。1日目は開会式、基調講演（東京農大前学長 進士五十八氏）、オリエンテーション（プログラムの趣旨説明等）、グループ討議、懇親会、2日目は模擬授業ワークショップ、ふりかえり、閉会式が行われた。本会議の大部分を占めたグループ討議と模擬授業ワークショップの内容を中心に報告する。

グループ討議では、参加者が11グループに分かれ、「おもしろい授業、つまらない授業」について議論した。「おもしろい授業」とは「実例、経験談が豊富」、「教科書に載っていない話が聴ける」、「学生参加型」等、逆に「つまらない授業」とは上記「おもしろい授業」の対極にあるものに加え、「内容が理解できない」、「私語が多い」等の要素が挙げられ、前者では「体験型」、「interactive」、「意外性」、後者では「一方的」、「雰囲気」といったキーワードが抽出された。そして、「おもしろい授業」であるかないかは、(a) 教員の個性・人柄、(b) 講義方法・進行、(c) 内容・成果で決定されるであろうという見解に到達したところでグループ討議は終了した。その後、翌日の模擬授業ワークショップの説明があった。テーマは特に設定されず、通常の授業を行えば良いものであった。そして、翌朝

の8:30までに模擬授業のシラバスを提出するよう指示があった。間もなく懇親会が始まり、その「宿題」をする時間はほとんど与えられなかった。もし事前にテーマが知らされていたら、参加者はその準備に時間を割いていただろう。授業改善は通常の教育・研究活動に支障が出ないよう、大きな時間を割かないで継続的に行うものであるという企画者からのメッセージであると私は捉えた。模擬授業ワークショップでは、1人15分の模擬授業を行い、その後15分程度の意見交換を行った。文学、経済学から工学まで非常に幅広い領域の授業を聴くこととなったが、予想に反して互いの内容を理解できた。この点についても議論し、「受講者には講義を聴く意思があり、その雰囲気が良かったのではないか」という結論に達した。また、異分野の受講者に少しでも理解してもらおうと「導入」に注意を払ったことも共通した。今更ではあるが「導入」、「授業の雰囲気づくり」の重要性を再認識させられた。閉会式で、本学 河田悌一学長から叱咤激励の言葉を頂き、すべてのプログラムが終了した。

2日間、授業改善のこのみ考えて過ごした。普段何気なく行っている「授業」をみつめなおす本当に良い機会であった。必ずしも「おもしろい授業」＝「質の高い授業」ではないかもしれないが、「おもしろい、聴く気になる授業」ができるよう、学生の協力も含め、工夫していきたい。